

郷<sup>ごう</sup> 四<sup>し</sup> 郎<sup>ろう</sup> 遺 跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第 10 集

1 9 9 6

日田市教育委員会

# 序 文

周囲を阿蘇と英彦山に囲まれ、水量豊かな三隈川を懐に抱く林業の町として知られておりました日田市も、ここ数年で九州横断自動車道や国道210号線バイパス等の道路網の整備が行われ、それに伴い大型の商業施設が増加してまいりました。

今回報告します郷四郎遺跡は、日田市民生活協同組合新治店の新店舗建設に伴い発掘調査を行ったものです。

現在の日田の市街地の大部分が条里跡と考えられておりまして、今回その一部を調査することができました。本書が、日田の歴史を研究する上で一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご協力をいただきました日田市民生活協同組合の方々をはじめ作業に従事された方々に、心から深く感謝申し上げます。

平成8年3月

日田市教育委員会

教育長 加藤 正 俊

# 例 言

1. 本書は、店舗建設に伴い事前に発掘調査を行った、郷四郎遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日田市民生活協同組合の委託を受け、日田市教育委員会が実施した。
3. 本書掲載の実測図および写真は、担当者が作成・製図・撮影したものを使用した。
4. 本書の執筆・編集は担当者が行った。
5. 付編の土壌分析には佐々木章氏（大分短期大学）の玉稿を賜った。
6. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、下記の方々に多大なる御教示、御協力をいただいた。

記して感謝いたします。

佐々木章(大分短期大学)、横田賢次郎(九州歴史資料館)、今田秀樹(天瀬町教育委員会)

日田市民生活協同組合関係者

[以上順不同・敬称略]

## 本文目次

I 調査に至る経過と組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の内容	4
IV まとめ	8
付 郷四郎遺跡で検出された溝状遺構のプラント・オパール分析による検討	11
－農業水路の可能性について－	大分短期大学 佐々木 章

## 挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図(S=1/20,000)	3
第2図 遺構配置図(S=1/250)	5
第3図 遺物実測図(S=1/3)	6
第4図 断面土層図(S=1/80)	7
第5図 調査区と周辺地籍図(昭和52年)	9

## 図 版 目 次

図版 1 調査区全景
出土遺物写真

## I 調査に至る経過と組織

平成7年5月23日付で日田市民生活協同組合(以下、市民生協)より店舗建設に伴う埋蔵文化財の所在の有無についての照会文が提出され、これを受けて市教育委員会では当該予定地が周知の遺跡に当たり、またこれまで周辺の調査例がなく遺跡の状況について判断しかねるため、平成7年5月29日、同事業予定地域の5,277㎡を対象とした試掘調査を実施した。調査では機械を使ってトレンチを設定し、確認を行ったところ、溝1条と中世の水田層2枚を検出し、弥生土器、土師器、染付などの遺物が出土した。このため、開発主である市民生協と遺跡の取扱いについての協議を行い、遺跡の保存が不可能な施設建設予定地約1,200㎡を対象に発掘調査を実施することとした。

発掘調査は平成7年6月23日から機械による表土除去作業を開始し、平成7年7月28日にすべての発掘作業を終了した。整理作業は、平成7年9月1日から行い、平成7年9月29日に終了した。調査関係者は次の通りである。

調査責任者 加藤 正俊(日田市教育長)

調査事務 原田 良伸( " 文化課長)

財津寅日出( " 課長補佐兼係長)

調査員 土居 和幸( " 主任)

行時 志郎( " 主事)

松下 桂子( " 主事補) 調査担当

永田 裕久( " 主事補)

森山敬一郎( " 嘱託)

発掘作業員 猪熊 誠、猪熊 スミ子、手嶋 トシエ、高村 笑美子、秋吉 タミエ、

猪熊 ヨネ、谷頭 忠雄、伊藤 フジエ、宮部 享平、渡辺 和仁、野内 太郎

森山 好美、財津 真弓、園田 光子、穂本 文雄、吉長 政敏、川津 正雄

荏隈 哲、河津 誠、中野 哲朗、秋 ヤエ子、江藤 キミ子、石井 ツヤ子

庄内 武子、諫山 三代子、財津 利枝

整理作業員 黒木 千鶴子

## II 遺跡の立地と環境

大分県西部に位置し、福岡県と隣接する日田市は盆地を形成し、周囲を標高 1,000m前後の山々に囲まれ、その内側には標高 130m前後の平坦な台地と90m前後の沖積地が形成されている。盆地の中心部では、周囲の山々を水源とする大小の河川が合流して筑後川となり、筑紫平野に向かって西流する。日田市の歴史においてこの筑後川が果たした役割は大きく、古くは弥生時代の吹上遺跡に見られるような大形成人用甕棺墓の採用や銅戈をはじめとする青銅器を使用した祭祀形態など、また古墳時代の県内でもごく稀な装飾古墳が集中することなど、筑後川を通じて北部九州の文化をダイレクトに受容していたことを推測することができる。通常盆地という地形はその地理的制約から小文化圏を形成しやすいが、日田の場合は河川交通によって周辺の文化を受け入れることが可能だったようである。

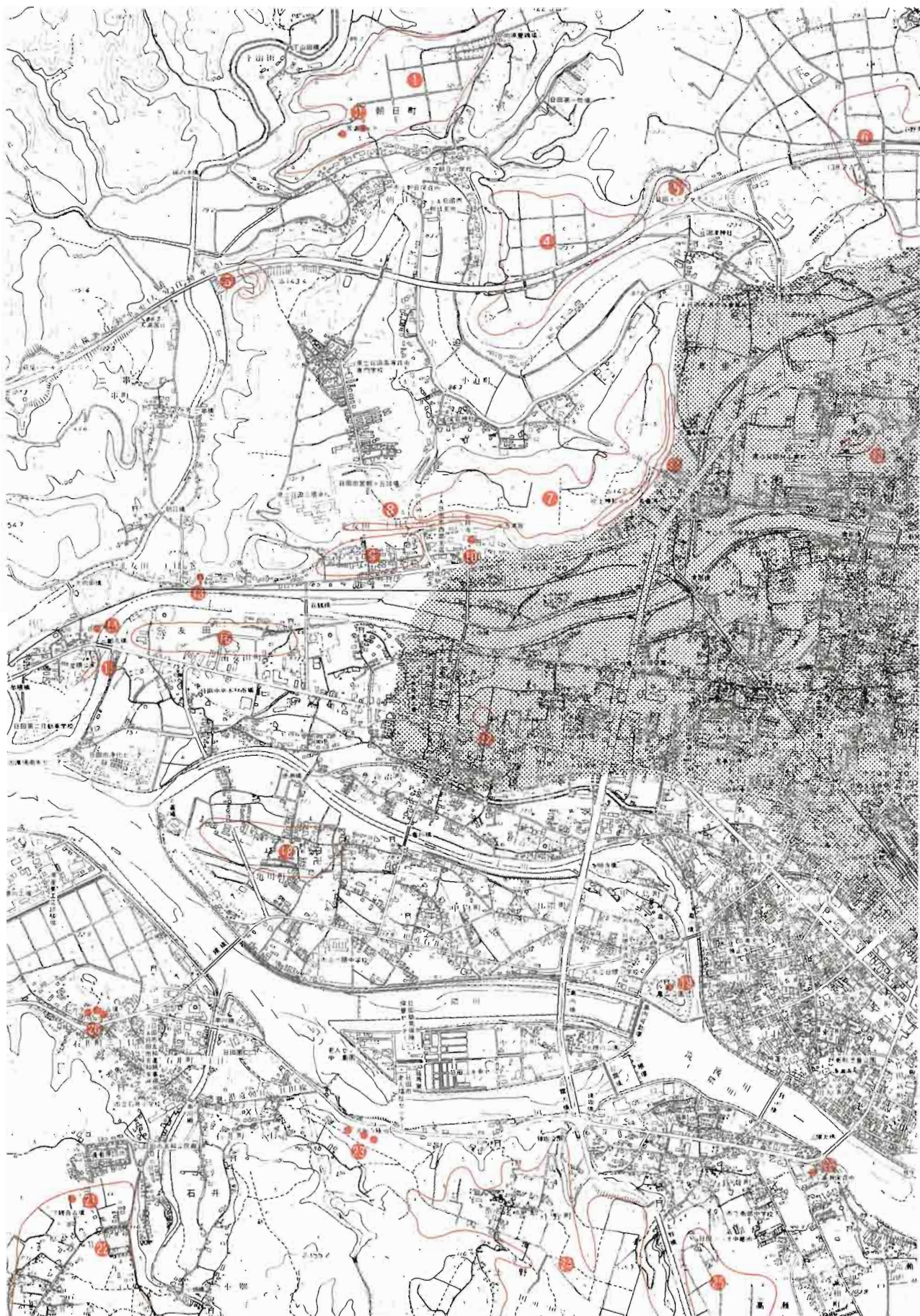
郷四郎遺跡は、筑後川の分流である庄手川と花月川間の微高地にある。川に挟まれた地域であるため地山面は主に砂で、常に花月川その他の河川の氾濫の影響を受けていたと思われる。郷四郎遺跡が含まれる大字十二町と隣の大字友田には条里に関連するといわれる地名をもつ字名「大縄手」がある。

郷四郎遺跡の北部の台地上には吹上遺跡・小迫辻原遺跡・朝日宮ノ原遺跡・草場第2遺跡など、日田の古代史を語るうえで欠かせない重要な遺跡が連なっている。また、これまで盆地内の沖積地では過去に幾度となく起こったであろう河川の氾濫によって遺跡の保存状態は悪いと考えられてきたが、近年の調査により弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての集落跡が確認され、中国後漢鏡「位至三公鏡」片が出土した徳瀬遺跡、古墳時代中期の鍛冶関連遺構と古代～中世の建物群を中心とする荻鶴遺跡など、沖積地においても遺構の残りが比較的良好な遺跡の存在が明らかになってきている。

- 《主要参考文献》 『日田市史』日田市 1990  
中島国夫「日田盆地のなりたち」『日田市三十年史』日田市 1974  
日田市教育委員会『吹上遺跡－6次調査の概要－』 1995  
” 『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 1995

1. 朝日宮ノ原遺跡
2. 天満1・2号墳
3. 小迫墳墓群
4. 小迫辻原遺跡
5. 草場第2遺跡
6. 後迫遺跡
7. 吹上遺跡
8. 北友田横穴墓群
9. 今泉遺跡
10. 岳林寺
11. 吹上横穴墓群
12. 月隈横穴墓群
13. 片山遺跡
14. 三郎丸古墳
15. 星隈横穴墓群
16. 荻鶴遺跡
17. 郷四郎遺跡
18. 徳瀬遺跡
19. 日隈古墳
20. ガランドヤ古墳群
21. 穴観音古墳
22. 長者原遺跡
23. 護願寺古墳群
24. 上野遺跡
25. 陣ヶ原遺跡
26. 姫塚古墳

※アミの部分は条里跡の範囲



第1図 周辺の遺跡分布図 (S = 1/20,000)

### Ⅲ 調査の内容

遺跡は、標高78～79mの沖積地にある。

調査は開発予定区域のうち現在水田として利用されている約 1,200㎡を対象に全面を掘り下げ、測量・写真撮影などを行って記録保存とした。

現地表面から調査区南側で50cm、調査区北側で80cm掘り下げたところで溝5条が検出された。また、調査区内にトレンチを設定して部分的に掘り下げたところ、弥生時代の遺物を含む包含層が検出された。土層は主に砂質土で構成され、最下層は人頭大の河原石を含む氾濫原である。遺構が掘り込まれている地盤は粗い砂層である。このような土層の構成は、遺跡が庄手川と花月川に挟まれて川に近い位置にあるためと考えられる。

以下遺構ごとに説明を加える。

#### (1) 1号溝

調査区の東側から南にむかってのびる溝で、幅約1.4 m、深さ約20cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、底面には多くの河原石がみられた。

遺物は、溝の上層から内面ヘラケズリの土師器の甕の体部などが少量出土している。

#### (2) 2号溝

調査区の中央部を東西に横切る溝で、幅約2 m、深さ約30cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。埋土は白灰色の粘質土で、底面には多くの河原石がみられた。溝内からは土器片が少量出土している。また、2 m北側には2号溝と方向を同じくする小溝があり、関連がありそうである。

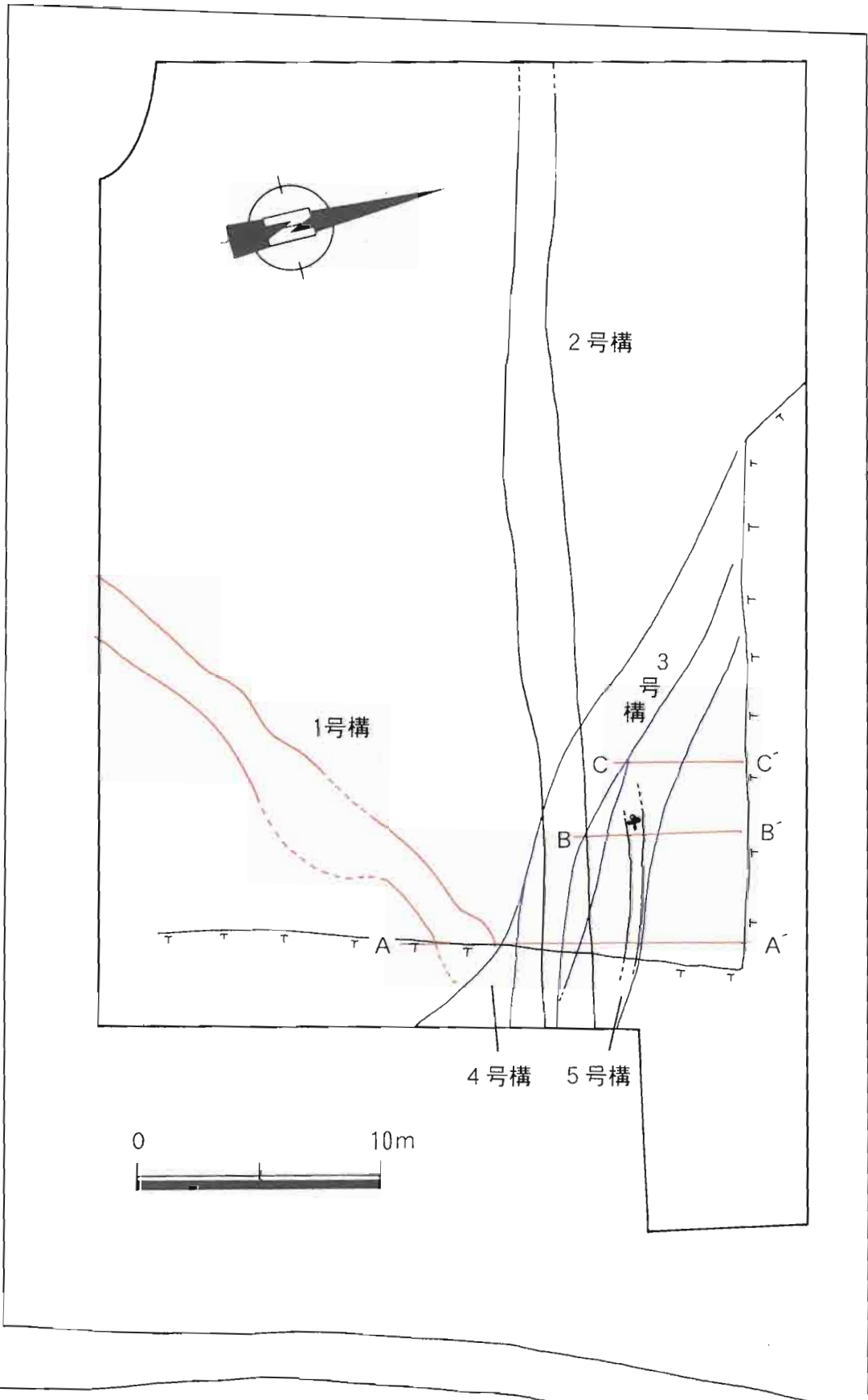
#### 出土遺物(第3図)

1・2とも土師器皿である。1は小片であるため底径は復元できないが、底部は糸切り痕が残る。2は底径 6.4cmで、1と同じく糸切り痕が残っている。

3は白磁の碗である。内面底部に1条、外面の口縁に近い位置に2条の沈線が巡っている。胎土は灰白色で、くすんだ透明釉が底部直上までかかっているが、底部は露胎となっている。

#### (3) 3号溝<sup>(注1)</sup>

調査区の東側から北にむかって走る溝で、埋土はやや黒味がかかった灰褐色砂質土である。溝内からは土器片が少量出土している。



第2図 遺構配置図 (S=1/250)



### 出土遺物(第3図)

4は土師器の坏である。全体の約1/3残存で、口径は10.8cm、器高4.0cm、胎土は細かく、焼成は良好である。外面には不明瞭な稜線が1条巡る。内面には特に稜線はなく、ゆるやかに立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。磨滅のため、調整は不明である。

#### (4) 4号溝<sup>(注1)</sup>

3号溝とほぼ方向を同じくする溝で、埋土は灰褐色砂質土である。溝内から土器の小破片が少量出土した。

#### (5) 5号溝<sup>(注1)</sup>

3・4号溝と方向をほぼ同じくする溝で、溝の南側は3・4号溝に削られており確認できない。溝内からは土器片が少量出土している。

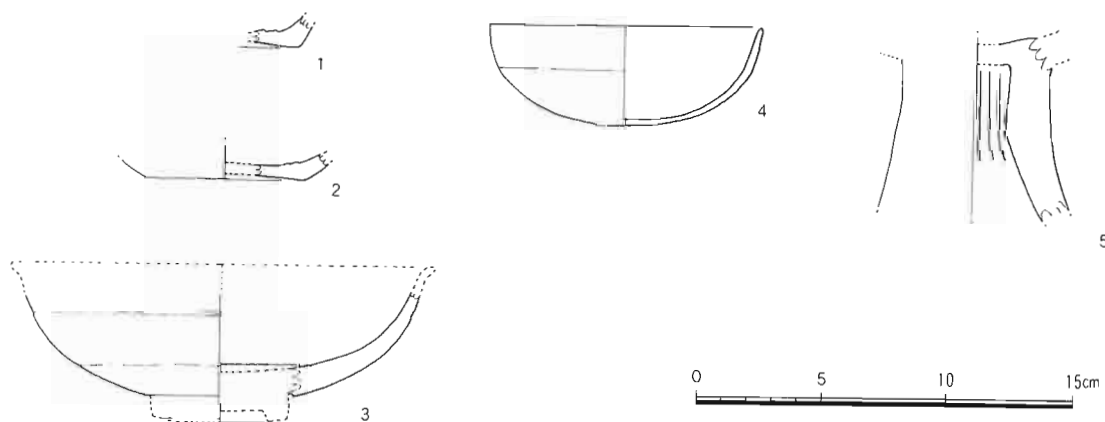
### (6) 包含層

これらの溝状遺構の検出面の下からは、弥生時代の遺物を含む河原石や粗い砂の堆積層が検出された。調査区の周囲などに設定したトレンチがすべて同じような状況であったことから、これは包含層と考えられる。おそらく弥生時代頃の河川の氾濫などにより形成されたものと思われる。

### 出土遺物(第3図)

5は弥生土器で、高坏の脚部である。表面は著しく磨滅しているため、調整は不明であるが、内面に絞りの痕跡が残っている。

(注1) 第2図において、3・4・5号溝についてはトレンチの土層観察で確認した点を結んで溝のラインとして図示しているため、厳密には推定ラインというべきであろう。



第3図 遺物実測図(S=1/3)

断面A



断面B



断面C



- 1 茶褐色砂質土
- 2 黒茶褐色粘土 しまりあり(1号溝埋土)
- 3 灰褐色砂質土 粘性・しまりなし(4号溝埋土)
- 4 黒みがかった灰褐色砂質土(3号溝埋土)
- 5 灰褐色粘質土 粘性・しまり強い(2号溝埋土)
- 6 黒灰褐色砂質土 粘性・しまりなし(5号溝埋土)
- 7 灰褐色砂質土 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を多く含む
- 8 灰褐色砂質土 粘性・しまりなし
- 9 灰褐色砂質土 粘性 弱い
- 10 灰褐色粘質土 粘性あり Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を多く含む
- 11 灰褐色粘質土 しまりあり
- 12 灰褐色粘質土 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を多く含む
- 13 灰褐色粘質土 粘性はあまり強くない

★はブラント・オパール分析試料採取位置

第4図 断面土層図(S=1/80)

#### IV まとめ

今回の調査では、溝5条と弥生時代包含層が確認された。まず溝についてはそれらの切り合い関係により1→(5→4→3)→2号の順に造られたことが確認されている。1号溝からは内面ヘラケズリの甕の破片が出土している。このことからこの遺構の時期は、古墳時代以前に遡ることはないと思われる。3～5号溝については、3号溝出土の坏が丸底でやや外反気味に口縁が立ち上がる形態から、市内南部の高瀬地区にある高瀬深ノ田遺跡S X 1出土の8世紀代に比定されている<sup>(注1)</sup>坏と類似しており、同時期としてよいと思われる。この3号溝に切られた4・5号溝の時期については出土土器が小片であることからいまひとつはつきりしない。しかし、3号溝とほぼ同じ方向で重複しあっていることや、5号溝でプラント・オパールが検出されなかったことから洪水によって一気に埋没した可能性が指摘されていることなどを考慮すると、3号溝を含めて短期間に掘り直しが行われた可能性が高い。したがって3～5号溝については、3号溝出土土師器坏を遺構の下限の遺物と見た場合、8世紀前後の時期幅を取っておきたい。次に、これらの溝を切ってつくられた2号溝であるが、土師器皿は13～14世紀に比定すると考えられ、また白磁碗は内面底部に沈線が1条めぐること、底部が露胎となる特徴から、大宰府史跡第45次調査(観世音寺)出土白磁碗(表採)に類似し、14世紀前半代の年代を与えられる<sup>(注2)</sup>。このほかに11世紀代の白磁や12～13世紀代の青磁の小片などが含まれることから、下限を第3図-3の白磁碗の年代とし、11世紀頃を上限とすることができそうである。

さて、郷四郎遺跡は、日野尚志の研究<sup>(注3)</sup>によると条里跡の範囲内に存在する(第1図参照)。

条里とは、律令制の時代に一辺一町の正方形で土地を区画した地割り法で、班田収授法の基礎となるものである。早いところでは既に古墳時代から開始されたという説もあるが、奈良時代中頃までにはほぼ完了したと普通考えられている。では日田では実際にはどうだったのだろうか。

今回検出された5条の溝のうち条里制が施行された時期のものは3～5号溝である。これと、調査区の北にある条里呼称をもつ地名「大縄手」とを照らし合わせると方向が合致せず、むしろ古代末～中世の2号溝が合う。また2号溝は現代の地籍図から推定した地割り図の東西方向の線とも合致する。このことから、この地域で現在観察される方形の土地区画が実施されたのは少なくとも奈良時代にはさかのぼらないと考えられる。つまりこの地域では2号溝の時期に区画整理された状態が現在まで残っているのであろう。しかしこのことは3～5号溝が条里制にともなう溝であることを否定するものではなく、当時の条里地割りの方向が2号溝の時期のものとはずれていたという可能性は残る。今後の周辺の調査を待ちたい。

(注1)田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査 1』大分県教育委員会 1995

(注2)横田賢次郎氏(九州歴史資料館)のご教示による。

森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

(注3)日野尚志「日田周辺における古代の歴史地理学的研究」『九州文化史研究紀要』第16号

九州大学文学部九州文化史研究施設 1971



第5図 調査区と周辺地積図 (昭和52年) 赤線：字界 青線：地割り(推定)

## 付 郷四郎遺跡で検出された溝状遺構のプラント・オパール分析による検討 —農業水路の可能性について—

大分短期大学 佐々木 章

イネ科植物の葉身中に存在した珪化機動細胞の化石(プラント・オパール)を土壌試料から顕微鏡下で検出して過去のイネ科植生や埋没植物体量、イネ科作物の生産量、水田作土層を推定する方法をプラント・オパール分析法と呼ぶ。郷四郎遺跡では5本の溝状遺構が検出された。この遺構の性格を検討する目的で、遺構を充填する土壌試料のプラント・オパール分析をおこなった。

### 試料および分析方法

プラント・オパール分析試料は溝状遺構ごとに調査区東側断面から採取した土壌を用いた(第4図参照)。試料は遺構のほぼ中央で溝底に近い部分から採取した。プラント・オパールの大きさは $50\mu\text{m}$ と微小なので土壌試料採取にあたっては試料が汚染されないように細心の注意が必要である。通常は筆者自らが試料を採取するのを原則とするが、調査はすでに終了しており、発掘担当者が汚染に注意して採取し保存してあった試料を分析に用いた。分析方法は通常の方法に従った。

### 分析結果および考察

主要な機動細胞プラント・オパール量を給源植物の地上部乾物量に換算して第1図に示す。単位は広さ $10\text{a}$ ( $1,000\text{ m}^2$ )深さ $1\text{ cm}$ の土壌中に埋没した植物の地上部乾物重( $\text{t}$ )である。イネについては生産されたであろう粗量も推定してあわせ示した(ハッチ部)。プラント・オパール分析に用いた分類名と植物体への換算係数は表1に示す値を使った。

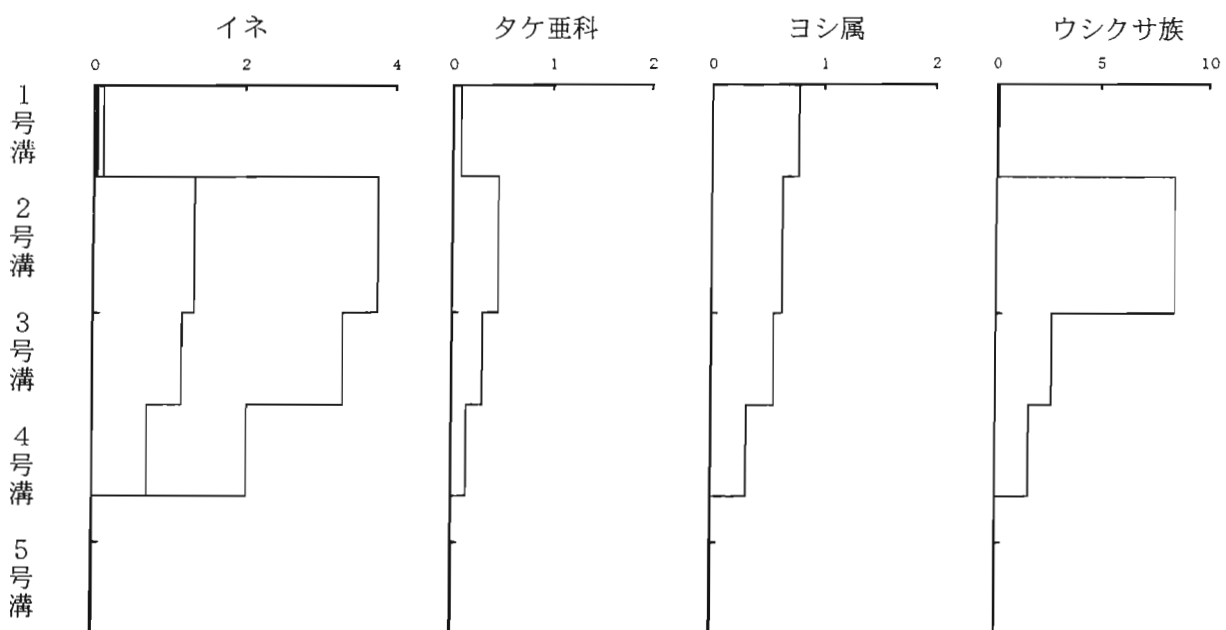
1号溝はイネ、タケ亜科、ウシクサ族などが少量含まれ、ヨシ属はやや多い。我が国で数多く検出されている水田作土の分析結果では、イネは $1\text{t}/10\text{a}/\text{cm}$ を超える事例が多い。これ以下の場合水田の例もあるが、多くは水田の近傍であったり上層の水田作土からの落ち込みであった。検出されたイネは少量で、上層からの落ち込みの可能性もある。しかし、上層は分析していないのでその可能性を否定できないが、2号溝、3号溝、4号溝などで多量に検出されることから上流に水田があってイネのプラント・オパールが流れ込んだものであろう。わが国のタケ亜類は大きくタケ類とササ類に分類できるが、検出されたプラント・オパールの多くはタケ類の特徴を示していた。ウシクサ族の分類はまだできていないが、ススキに代表される。また、ヨシ属の多くは流れの早い場所に生育するツルヨシの特徴を示している。どの溝も、充填する埋め土はほぼ均質で、分層できない。恐らく洪水によって流された上流側の水田作土の一部が流れ込んだものであろう。これらのことから、新設された1号溝の上流にはヨシ属、おそらくツルヨシの生育するヨシ原を開墾して造成した水田があったと考えられる。2号溝はイネ属が非常に多く、ウシクサ族も非常に多い。ヨシ属も多く、タケ亜科もやや多い。2号溝の上流には水田が広がり、さらに上流にはヨ

シ原とススキ原が広がっていたと考えられる。また、周辺にはタケ林も存在したであろう。周辺の水田作土には上流から流れ込んだウシクサ族、ヨシ属、タケ亜科のプラント・オパールが含まれており、さらに生産されたイネのプラント・オパールが多量に蓄積したものであろう。3号溝は2号溝に先行する。2号溝と同様な環境が推定できるが量が少ない。4号溝はさらに先行する。これも同じような性格の環境を想定できるが、プラント・オパール検出量はもっと少ない。5号溝では、充填する砂の粒度が大きいほか、プラント・オパール自体がまったくといっていいほど検出されない。5号溝を建設したものの洪水で埋没してしまったのではないだろうか。取水方法に問題があったのかもしれない。その後、水路と水田が安定し、検出されるイネ機動細胞プラント・オパールも増加したと考ええると矛盾がない。2号溝の時期には乾燥も進行し、周辺では比較的安定した水田が広がっていたと考えられる。

郷四郎遺跡の800m下流(西)側に位置する荻鶴遺跡でも発掘調査によって水田遺構が検出された。また、検出された水田の他に、プラント・オパール分析によって埋没作土層の存在が推定されている。対応する時期が明らかになれば、開発の歴史を解明する上からも有力な手掛かりが得られる。今後の研究に待ちたい。

表1. プラント・オパール分類と換算係数

分類名	代表植物	密度(×10 <sup>4</sup> 個/g)
イネ	イネ <i>Oriza sativa</i>	3.40
ヨシ属	ヨシ <i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴギダケ <i>Pleioblastus Chino</i> <i>var. virides f. pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ <i>Miscanthus sinensis</i>	2.79



第1図 郷四郎遺跡のプラント・オパール密度から推定した埋没植物体量 (t/10 a/cm)

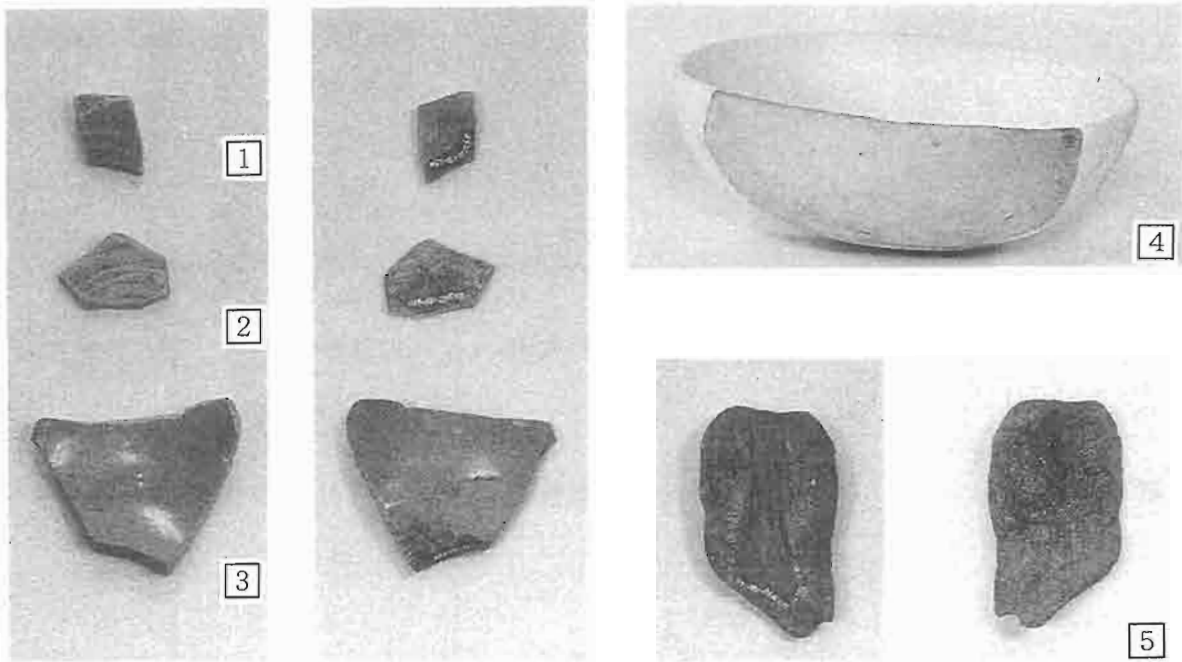
<図版1>

調査区全景



1・2・3号溝(東より)

出土遺物写真



番号は第3図に対応

フリガナ	ゴウシロウ イセキ							
書名	郷四郎遺跡							
副書名	日田市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	第10集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	松下桂子							
編集機関	日田市教育委員会							
所在地	〒877 大分県日田市田島2-6-1							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ゴウシロウ 郷四郎	ヒタシオオアザ 日田市大字 ジュウニチョウ 十二町 アザゴウシロウ 字郷四郎					1995. 6. 23 ~1995. 7. 28	1,230㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
郷四郎		古墳 古代 中世	溝状遺構	古墳時代・古代・中世 の土器、陶磁器				



郷四郎遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第10集

1996年

発行：日田市教育委員会  
大分県日田市田島2-6-1

印刷：尾花印刷有限会社

